

日蓮大聖人御書全集

みようみつしょうにんごしょうそく

妙密上人御消息

新版
1706
ゝ
1713

みようみつしようにんごしようにそく

妙密上人御消息

けんじ

ねん

うるう

がつ

にち

さい

みようみつ

建治 2 年 ('76) 閏 3 月 5 日

55 歳

妙密

せいふごかんもん

た

そうら

お

青鳧五貫文、給び候い畢わんぬ。

そ

ごかい

はじ

ふせつしようかい

ろくはらみつ

はじ

だんはらみつ

夫れ、五戒の始めは不殺生戒、六波羅蜜の始めは檀波羅蜜

じゅうぜんかい

にひやくごじっかい

じゅうじゅうごんかいとう

いっさい

しよかい

なり。十善戒・二百五十戒・十重禁戒等の一切の諸戒の

はじ

みな

ふせつしようかい

かみだいしよう

しもぶんぼう

いた

始めは皆、不殺生戒なり。上大聖より下蚊虻に至るまで、

いのち

たから

うば

だいいち

じゅうざい

命を財とせざるはなし。これを奪えば、また第一の重罪

によらい

よ

い

たま

しよう

哀

もと

なり。如来、世に出で給いては、生をあわれむを本とす。

しよう

証

いのち

うば

せじき

しゆ

生をあわれむしるしには、命を奪わず、施食を修するが、

第一の戒にて候なり。
だいいち かい そうろう

人に食を施すに、三つの功德あり。一には命をつぎ、二
ひと じき ほどこ みつ くだく いち いのち 継 に

には色をまし、三には力を授く。命をつぐは、人中・天上
いろ 増 さん ちから さず いのち にんちゆう てんじよう

に生まれては長命の果報を得、仏に成つては法身如来と
う ちようめい かほう え ほとけ な ほっしんによらい

顕れ、その身虚空と等し。力を授くる故に、人中・天上
あらわ み こくう ひと ちから さず ゆえ にんちゆう てんじよう

に生まれては威徳の人と成つて眷属多し。仏に成つては
う いとく ひと な けんぞくおお ほとけ な

報身如来と顕れて蓮華の台に居し、八月十五夜の月の晴天
ほうしんによらい あらわ れんげ うてな こ はちがつじゆうごや つき せいてん

に出でたるがごとし。色をます故に、人中・天上に生まれ
い いろ 増 ゆえ にんちゆう てんじよう う

ては三十二相を具足して端正なること華のごとく、仏に成
さんじゆうにそう ぐそく たんじよう はな ほとけ な

おうじんによらい あらわ しゃかぶつ

つては応身如来と顕れて釈迦仏のごとくなるべし。

そ しゅみせん はじ たず いちじん たいかい はじ

夫れ、須弥山の始めを尋ねれば一塵なり。大海の初めは

いちろ いち かさ に かさ さん ないし

一露なり。一を重ぬれば二となり、二を重ぬれば三、乃至

じゆう ひやく せん まん おく あそうぎ はは いち

十・百・千・万・億・阿僧祇の母は、ただ一なるべし。

にほんこく ぶつぼう はじ てんじんしちだい

されば、日本国には仏法の始まりしことは、天神七代・

ちじんごだい のち にんのうひやくだい はじ おう じんむてんのう もう

地神五代の後、人王百代、その初めの王をば神武天皇と申

じんむ だいさんじゅうだい あ きんめいてんのう ぎよう ひやくさい

す。神武より第三十代に当たつて欽明天皇の御宇に、百濟

こく きよう きようしゅしやくそん みえい そうにとつ わた よう

国より、経ならびに教主釈尊の御影、僧尼等を渡す。用

めいてんのう たいし じようぐう もう ひと ぶつぼう よ はじ ほけきよう

明天皇の太子の上宮と申せし人、仏法を読み初め、法華経

かんど

取 寄

たま

しよ

つく

ひろ

たま

を漢土よりとりよせさせ給いて、疏を作つて弘めさせ給い

のち

にんのうさんじゅうしちだいこうとくてんのう

ぎよう

かんろく

き。それより後、人王三十七代孝徳天皇の御宇に、観勒

そうじよう

もう

ひと

しんらくこく

さんろんしゅう

じようじつしゅう

わた

おな

僧正と申す人、新羅国より三論宗・成実宗を渡す。同じ

みよ

どうしよう

もう

そう

かんど

ほつそうしゅう

くしやしゅう

わた

き御代に、道昭と申す僧、漢土より法相宗・俱舎宗を渡す。

おな

みよ

しんじようだいとく

けこんしゅう

わた

だいしじゅうしだいげんしろう

同じき御代に、審祥大徳、華嚴宗を渡す。第四十四代元正

てんのう

ぎよう

てんじく

しようにん

だいにちきよう

わた

だいしじゅうごだい

天皇の御宇に、天竺の上人、大日経を渡す。第四十五代

しようむてんのう

ぎよう

がんじんわじよう

もう

ひと

かんど

にほんこく

聖武天皇の御宇に、鑑真和尚と申せし人、漢土より日本国に

りつしゅう

わた

つ

てんだいしゅう

げんぎ

もんぐ

えんどんしかん

律宗を渡せし次いでに、天台宗の玄義・文句・円頓止観・

じようみようしよとう

わた

しんごんしゅう

ほつけしゅう

にしゅう

浄名疏等を渡す。しかれども、真言宗と法華宗との二宗

をばいまだ弘め給わず。

にんのうだいごじゅうだいかん むてんのう

みよ

さいちよう

もう

しょうそう

人王第五十代桓武天皇の御代に、最澄と申す小僧あり、

のち

でんぎようだいし

ごう

ひと

につとう いぜん

しんごんしゅう

後には伝教大師と号す。この人、入唐已前に真言宗と

てんだいしゅう

にしゅう

しょうしよ

じゅうごねん

あいだ

いちにん

み お

たま

天台宗の二宗の章疏を十五年が間ただ一人見置き給

のち

えんりやくにじゅうさんねんしちがつ

かんど

わた

返

とし

いき。後に延暦二十三年七月に漢土に渡り、かえる年の

ろくがつ

ほんちよう

つ

たま

てんだい

しんごん

にしゅう

しちだいじ

六月に本朝に着かせ給いて、天台・真言の二宗を七大寺の

せきがくすうじゅうにん

さず

たま

のち

いま

しひやくねん

碩学数十人に授けさせ給いき。その後、今に四百年なり。

そう

にほんこく

ぶつぽうわた

いま

しちひやくよねん

総じて、日本国に仏法渡つて、今に七百余年なり。ある

みだ

みようごう

だいにち

みようごう

しゃか

いは弥陀の名号、あるいは大日の名号、あるいは釈迦の

みようごうとう

いっさいしゅじよう

すす

たま

ひとびと

名号等をば一切衆生に勧め給える人々はおわすれども、

ほけきよう

だいもく

なんみようほうれんげきよう

とな

すす

いまだ法華經の題目・南無妙法蓮華經と唱えよと勧めたる

ひと

にほんこく

かぎ

がつしとう

ほとけ

めつごいつせんねん

人なし。日本国に限らず、月氏等にも、仏の滅後一千年の

あいだ

かしよう

あなん

めみよう

りゆうじゆ

むじやく

てんじんとう

だいろんじ

ぶつぽう

間、迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親等の大論師、仏法

ごてんじく

ぐつう

かんど

ぶつぽうわた

すうひやくねん

を五天竺に弘通せしかども、漢土に仏法渡つて数百年の

あいだ

まとうが

じくほうらん

らじゆうさんぞう

なんがく

てんだい

みようらくとう

間、摩騰迦・竺法蘭・羅什三蔵・南岳・天台・妙楽等、

しよ

つく

きよう

しゃく

あるいは疏を作り、あるいは經を釈せしかども、いまだ

ほけきよう

だいもく

みだ

みようごう

すす

法華經の題目をば弥陀の名号のごとく勧められず。ただ

じしんいちにん

とな

きよう

ごう

とき

こうじ

自身一人ばかり唱え、あるいは經を講ずる時、講師ばかり

とな はつしゅう くしゅうとう

唱うることあり。しかるに、八宗・九宗等、その義まちな

たぶん みだ みようごう つぎ かのん みようごう つぎ

ちなれども、多分は弥陀の名号、次には観音の名号、次に

しやかぶつ みようごう つぎ だいにち やくしとう みようごう とな たま

は釈迦仏の名号、次には大日・薬師等の名号をば唱え給え

こうそ せんとかとう ゆえあ いちだい

る高祖・先徳等はおわすれども、いかなる故有つてか一代

しよきよう かんじん ほけきよう だいもく とな ゆえ

諸教の肝心たる法華經の題目をば唱えざりけん。その故を

よ よ たず なら たも たと だいい いっさい やまい

能く能く尋ね習い給うべし。譬えば、大医の、一切の病の

こんげん くすり せんじん わきま ゆえ だいい ぐすり 使

根源、薬の浅深は弁えたれども、故なく大事の薬をつか

やまい したが ほつけ めつごししょうぞう

うことなく病に随うがごとし。されば、仏の滅後正像

にせんねん あいだ ぼんのう やまいかる いちだいいいち ろうやく

二千年の間は、煩惱の病軽かりければ、一代第一の良薬の

みようほうれんげきよう

ごじ

すす

いま まつぼう

い

妙法蓮華經の五字をば勧めざりけるか。今、末法に入りぬ。

ひと

じゅうびようあ

あみだ

だいにち

しゃかとう

きょうやく

人ごとに重病有り。阿弥陀・大日・釈迦等の輕藥にては

じ がた

治し難し。

つき

また、月はいみじけれども、秋にあらざれば光を惜しむ。

はな

花はめでたけれども、春にあらざればさかず。一切、時に

はる

咲

いつさい

とき

よることなり。されば、正像二千年の間は題目の流布の時

あ

に当たたらざるか。

ぶつきよう

ひろ

ほとけ

おんつか

ほとけ

また、仏教を弘むるは仏の御使いなり。したがって仏

でし

ゆず

う

おのおのべつ

しょうほうせんねん

い

の弟子の譲りを得ること各別なり。正法千年に出でし

ろんじ ぞうほうせんねん

い

にんしとう

おお

しょうじよう

ごんだいじよう

論師、像法千年に出ずる人師等は、多くは、小乗、権大乘、

ほけきよう

しやくもん

しょう ゆず

ひとびと

法華經のあるいは迹門あるいは枝葉を譲られし人々なり。

ほんもん

かんじん

だいもく

ゆず

じようぎよう ぼさつ よ

いまだ本門の肝心たる題目を譲られし上行菩薩世に

しゆつげん

たま

ひと

まつぼう

しゆつげん

みようほうれんげきよう

出現し給わず。この人、末法に出現して、妙法蓮華經の

ごじ

いちえんぶだい

うち

くに

ひと

ひろ

れい

五字を一閻浮提の中、国ごと人ごとに弘むべし。例せば、

とうじ

にほんこく

みだ

みようごう

るふ

当時、日本国に弥陀の名号の流布しつるがごとくなるべき

か。

しかるに、日蓮は、いずれの宗の元祖にもあらず、また

にちれん

しゅう

がんそ

まつよう

じかい

はかい

か

むかい

そう

うち

むち

末葉にもあらず。持戒・破戒にも闕けて無戒の僧、有智・無智

外

ごよう

もの

もう

にもはずれたる牛羊のごとくなる者なり。いかにしてか申

はじ

じようぎようぼさつ

しゆつげん

ひろ

たも

し初めけん、上行菩薩の出現して弘めさせ給うべき

みようほうれんげきよう

ごじ

さきだ

寝言

こころ

妙法蓮華經の五字を、先立つて、ねごとのように心にも

なんみようほうれんげきよう

もう

はじ

そうら

とな

あらず南無妙法蓮華經と申し初めて候いしほどに唱うる

せん

善

そうろう

あ

なり。詮ずるところ、よきことにや候らん、また悪しき

はべ

われ

知

ひと

弁

ことにや侍るらん、我もしらず、人もわきまえがたきか。

ほけきよう

ひら

はい

たてまつ

きよう

とうかく

ただし、法華經を開いて拝し奉るに、この經をば、等覺

ぼさつ

もんじゆ

みろく

かんのん

ふげん

いっくいちげ

の菩薩、文殊・弥勒・觀音・普賢までも、たやすく一句一偈

たも

ひと

ほとけ

ほとけ

と

たま

をも持つ人なし。「ただ仏と仏とのみ」と説き給えり。さ

けこんぎよう　さいしよ　とんせつ　えんまん　きよう

れば、華嚴経は最初の頓説・円満の経なれども、法慧等の

しほさつと　たも　はんによきよう　けこんぎようほど

四菩薩説かせ給う。般若経はまた華嚴経程こそなけれども、

とうぶん　さいじよう　きよう　しゅぼだい　と

当分は最上の経ぞかし。しかれども、須菩提これを説く。

ほけきよう　さんじんえんまん　しゃか　こんく　みようせつ

ただ法華経ばかりこそ、三身円満の釈迦の金口の妙説にて

そうろう　ふげん　もんじゅ　いっくいちげ

は候なれ。されば、普賢・文殊なりとも、たやすく一句一偈

と　たも　まつだい　ほんぷ　われ

をも説き給うべからず。いかにいわんや、末代の凡夫、我ら

しゅじよう　いちじにじ　じしん　たも

衆生は、一字二字なりとも、自身には持ちがたし。

しよしゆう　がんそとう　ほけきよう　よ　たてまつ　おのおの　でしとう

諸宗の元祖等、法華経を読み奉れば、各々その弟子等

わ　し　ほけきよう　こころ　えたま　おも

は「我が師は法華経の心を得給えり」と思えり。しかれど

せん そん

じ おんだいし じんみつきよう

ゆいしきろん し

も、詮を論ずれば、慈恩大師は深密経・唯識論を師として

ほけきよう

読

かじようだいし

はんにやきよう

ちゆうろん

し

ほけきよう

法華経をよみ、嘉祥大師は般若経・中論を師として法華経

とじゆん

ほうぞうとう

けこんきよう

じゆうじゆうびばしやろん

し

をよむ。杜順・法蔵等は華嚴経・十住毘婆沙論を師として

ほけきよう

ぜんむい

こんごうち

ふくうとう

だいにちきよう

し

法華経をよみ、善無畏・金剛智・不空等は大日経を師とし

ほけきよう

ひとびと

おのおのほけきよう

おも

て法華経をよむ。これらの人々は、各法華経をよめりと思

いづくいちげ

ひと

せん ろん

えども、いまだ一句一偈もよめる人にはあらず。詮を論ず

でんぎようだいし 判

い

ほけきよう

ほ

れば、伝教大師ことわりて云わく「法華経を讃むといえど

かえ

ほつけ

こころ

ころ

うんぬん

れい

げどう

ぶつきよう

も、還つて法華の心を死す」云々。例せば、外道は仏経を

げどう

おな

こうもり

ひる

よる

み

あか

よめども外道と同じ、蝙蝠が昼を夜と見るがごとし。また赤

おもて もの しろ かがみ あか おも たち かお 映

き面の者は、白き鏡も赤しと思ひ、太刀に顔をうつせる

者 まど おもて 細 長 おも に

もの、円かなる面をほそながしと思うに似たり。

いま にちれん い こんとう きやうもん ふか 守 いつきやう

今、日蓮はしからず。「已今当」の経文を深くまぼり、一経

かんじん だいもく われ とな ひと すす あさ なか よもぎ すみ

の肝心たる題目を、我も唱え、人にも勧む。麻の中の蓬、墨

打 き じたい しようじき じねん す

うてる木の、自体は正直ならざれども、自然に直ぐなるが

きやう とな 曲が こころ まさ し

ごとし。経のままに唱うれば、まがれる心なし。当に知る

ほとけ みこころ われ み い たま とな

べし、仏の御心の我らが身に入らせ給わずば唱えがたきか。

たにん ひろ たも ぶつぽう みな し なら

また、それ、他人の弘めさせ給う仏法は、皆、師より習ひ

つた たま れい かまくら ごけにんとう ごちぎやう しよりやう じとう

伝え給えり。例せば、鎌倉の御家人等の御知行、所領の地頭、

いっちようにちよう

みな　こだいしやうけ　ごおん

あるいは一町二町なれども、皆、故大將家の御恩なり。い

ひやくちやうせんちやう　いつこくにこく　ちぎやう　ひとびと

かにいわんや、百町千町、一国二国を知行する人々をや。

けんじん　もう　善　し　つた　ひと　しやうにん　もう　し

賢人と申すは、よき師より伝えたる人、聖人と申すは、師

な　われ　さと　ひと　ほとけ　めつご　がっし　かんど　にほんこく

無くして我と覚れる人なり。仏の滅後、月氏・漢土・日本国

ふたり　しやうにん　てんだい　でんぎやう　ふたり

に二人の聖人あり。いわゆる天台・伝教の二人なり。こ

ふたり　しやうにん　い　けんじん　い

の二人をば、聖人とも云うべし、また賢人とも云うべし。

てんだいだいし　なんがく　つた　けんじん　どうじやう

天台大師は南岳に伝えたり。これは賢人なり。道場にして

じげぶつじやう　たま　しやうにん　でんぎやうだいし　どうずい

自解仏乗し給いぬ。また聖人なり。伝教大師は道邃・

ぎやうまん　しかん　えんどん　だいかい　つた　けんじん

行満に止觀と円頓の大戒を伝えたり。これは賢人なり。

につとういぜん

にほんこく

しんごん

しかん

にしゅう

し

入唐已前に、日本国にして、真言・止観の二宗を師なくし

覚

きわ

てんだいしゅう

ちえ

ろくしゅう

しちしゅう

すぐ

てさとり極め、天台宗の智慧をもつて六宗・七宗に勝れ

こころえたま

しようにん

げてん

い

たりと心得給いしは、これ聖人なり。しかれば、外典に云

う

し

もの

じよう

じよう

わく「生まれながらにしてこれを知る者は上なりへ上と

しようにん

な

まな

し

もの

じ

じ

は聖人の名なり、学んでこれを知る者は次なりへ次とは

けんじん

な

ないてん

い

わ

ぎよう

しほな

とううんぬん

賢人の名なり」。内典に云わく「我が行は師保無し」等云々。

そ

きようしゆしやくそん

しやばせかいだいいち

しようにん

てんだい

夫れ、教主釈尊は娑婆世界第一の聖人なり。天台・

でんぎよう

ににん

しようにん

つう

めみよう

りゆうじゆ

むじやく

てんじん

伝教の二人は聖賢に通ずべし。馬鳴・竜樹・無著・天親

とう

ろうし

こうしとう

しようにん

ごんだいじよう

等、老子・孔子等は、あるいは小乗、あるいは権大乘、

げてん しょうけん

ほけきよう しょうけん

いま

あるいは外典の聖賢なり。法華經の聖賢にはあらず。今、

にちれん

しょう

けん

じかい

むかい

うち

日蓮は、聖にも賢にもあらず、持戒にも無戒にも、有智に

むち

あ

ほけきよう

だいまく

るふ

も無智にも当たらず。しかれども、法華經の題目の流布す

のちのごひやくさい

にせんにひやくにじゅうよねん

とき

う

ちか

べき後五百歳、一千二百二十余年の時に生まれて、近くは

にほんこく

とお

がつし

かんど

しよしゅう

ひとびととな

はじ

さき

日本国、遠くは月氏・漢土の諸宗の人々唱え始めざる先に、

なんみようほうれんげきよう

こうしよう

呼

にじゅうよねん

經

南無妙法蓮華經と高声によばわりて二十余年をふるあい

の

う

きず

被

だ、あるいは罵られ、打たれ、あるいは疵をこうぼり、あ

るぎい

にど

しぎい

いちどさだ

ほか

だいなん

るいは流罪に二度、死罪に一度定められぬ。その外の大難、

かず

知

たと

だいとう

だいず

ひた

しょうすい

たいぎよ

あ

数をしらず。譬えば、大湯に大豆を漬し、小水に大魚の有

きよう い

るがごとし。経に云わく「しかもこの経は、如来の現に在

おんしつおお

めつど のち

い

すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。また云わ

いつさいせけん あだおお

しん がた

もろもろ

く「一切世間に怨多くして信じ難し」。また云わく「諸の

むち ひと あつく めり

あ

い

無智の人の、悪口・罵詈するもの有らん」。あるいは云わく

とうじようがしやく くわ

ひんずい

とう

「刀杖瓦石を加う」。あるいは「しばしば擯出せられん」等

うんぬん

きようもん

にちれんにほんこく しょう

ほとけ

云々。これらの経文は、日蓮日本国に生ぜずんば、ただ仏

みこと あ

ぎむな

たと

はな咲く

み

の御言のみ有つて、その義空しかるべし。譬えば、花さき菓

生 いかずち 鳴

あめ 降

ほとけ

きんげんむな

ならず、雷なりて雨ふらざらんがごとし。仏の金言空し

しょうじき

おんきよう

だいもうご

まじ

くして正直の御経に大妄語を雑えたるなるべし。これら

をもつて思うに、恐らくは天台・伝教の聖人にも及ぶべし。
また老子・孔子をも下しぬべし。

にほんこく なか いちにん なんみようほうれんげきよう とな

日本国の中にただ一人、南無妙法蓮華經と唱えたり。これ

しゅみせん はじ いちじん たいかい はじ いちろ ににん さんにん

は須弥山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。二人・三人・

じゆにん ひやくにん いっこく にこく ろくじゅうろつかこく しまふた およ

十人・百人、一国・二国、六十六箇国、すでに島二つにも及

いま ぼう ひとびと とな たも かみいちにん

びぬらん。今は謗ぜし人々も唱え給うらん。また上一人より

しもばんみん いた ほけきよう じんりきほん いちどう

下万民に至るまで、法華經の神力品のごとく、一同に

なんみようほうれんげきよう とな たも

南無妙法蓮華經と唱え給うこともやあらんずらん。

き 静 おも かぜ止 はる とど おも

木はしずかならんと思えども風やまず、春を留めんと思え

なつ

にほんこく

ひとびと

ほけきよう

たつと

にちれんぼう

ども夏となる。日本国の人々は、法華経は尊けれども日蓮房

にく

なんみようほうれんげきよう

とな

断

たも

が悪ければ南無妙法蓮華経とは唱えまじとことわり給うと

いま いちど

に ど

だいもうここく

お

よ

断

いき

つしま

も、今、一度も二度も大蒙古国より押し寄せて、壱岐・対馬

なん

う

ころ

によ

お

と

きよう

かまくら

のように、男をば打ち死し、女をば押し取り、京・鎌倉に

う い

こくしゅ

だいじん

ひやつかんと

から

と

ぎゆうば

打ち入って国主ならびに大臣・百官等を搦め取り、牛馬の

まえ

蹴立

せ

とき

なんみようほうれんげきよう

前にけたて、つよく責めん時は、いかでか南無妙法蓮華経と

とな

唱えざるべき。

ほけきよう

だいご

まき

にちれん

おもて

すうかどう

法華経の第五の巻をもつて日蓮が面を数箇度打ちたり

にちれん

なん

おも

にちれん

はべ

ふきようほん

しは、日蓮は何とも思わず、うれしくぞ侍りし。不軽品の

ごとく身を責め、勸持品のごとく身に当たつて貴し貴し。
み せ かんじほん み あ たつと たつと

ただし、法華經の行者を悪人に打たせじと仏前にして
ほけきよう ぎようじや あくにん う ぶつぜん

起請をかきたりし梵王・帝釈・日月・四天等、いかに口惜
きしよう 書 ぼんのう たいしやく にちがつ してんとう くち お

しかるらん。現身にも天罰をあたらざることは、小事なら
げんしん てんばつ 当 しょうじ

ざれば、始中終をくくりてその身を亡ぼすのみならず、議
しちゆうじゆう 括 み ほろ ぎ

せらるるか。あえて日蓮が失にあらず。謗法の法師等をたす
にちれん とが ほうぼう ほつしとう 助

けんがために、彼らが大禍を自身に招きよせさせ給うか。
かれ たいか じしん まね 寄 たも

これらをもつて思うに、便宜ごとの青鳧五連の御志は、
おも びんぎ せいふこれん おんこころざし

日本国に法華經の題目を弘めさせ給う人に当たれり。國中
にほんこく ほけきよう だいもく ひろ たも ひと あ こくちゆう

しよにん

いちにんににん

ないしせんまんおく

ひと

だいもく

とな

の諸人、一人二人、乃至千万億の人、題目を唱うるならば、

ぞんがい

くどくみ

集

たも

くどく

たいかい

つゆ

存外に功德身にあつまらせ給うべし。その功德は、大海の露

集

しゅみせん

みじん

積

こと

じゅうらせつによ

をあつめ、須弥山の微塵をつむがごとし。殊に十羅刹女は

ほけきよう

だいもく

しゅご

ちか

たも

法華經の題目を守護せんと誓わせ給う。

すい

みようみつしようにん

にようぼう

はは

これを推するに、妙密上人ならびに女房をば、母の

いっし

おも

みようご

お

あい

ちゅうや

一子を思うがごとく、犍牛の尾を愛するがごとく、昼夜に

守

たも

まぼらせ給うらん。たのもし、たのもし。

こととお

くわ

もう

暇

にようぼう

事多しといえども、委しく申すにいとまあらず。女房に

くわ

もう

たま

へつら

ことば

も委しく申し給え。これは諂える言にはあらず。

こがね 焼

いろ 勝

つるぎ 研

と

金はやけばいいよ色まさり、剣はとげばいいよ利く

ほけきよう

くどく

讃

くどく

なる。法華經の功德は、ほむればいいよ功德まさる。

にじゅうはつぽん まさ

僅

ほ

ことば

おお

二十八品は正しきことはわずかなり、讃むる言こそ多く

そうら おほ

候えと思しめすべし。

うるうさんがついつか

閏三月五日

にちれん

かおう

日蓮

花押

くわがやつのみようみつしょうにんごへんじ

楯谷妙密上人御返事